

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 21 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530354

研究課題名（和文） 高度経済成長期農家子弟の就・離農と家・むら
—社会経済史とライフヒストリーの総合

研究課題名（英文） Engaging and giving up farming of young farmers during the high economic growth period in Japan and their houses and villages —comprehensive study of social economic history and life history

研究代表者：庄司 俊作 (SHOJI SHUNSAKU)

同志社大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：70130309

研究成果の概要（和文）：本研究では、農家の子弟が歴史的にどのように就農し、また離農（離村を含む）してきたのかという問題を、経済つまり高度経済成長の影響、および家と村つまり地域社会の規定性の2つの視点から、社会経済史的に考察した。研究の実施にあたっては、農村と農家の現地調査による農民家族と労働力移動・社会移動に関する在地資料の収集と、農民と離農者のライフヒストリー（個人史）の蓄積を重視し、社会経済史の統計分析と総合することを企図した。研究の結果、高度成長と戦後教育の定着による農家の歴史的変化と、家と村に規定されて変わらなかった農家の両面が明らかになり、戦前と戦後、後者のうち高度成長期以前と以後の各時代の歴史的個性を農家のあり方から具体的につかむ手がかりが得られた。

研究成果の概要（英文）：In this study I examined historically the subject that is how farmer's children engaged in farming and left from farming (including leaving from village) from two point of view; the influence of economy that is a high economic growth and the regulation of local communities which are households and villages. In order to precede the research, I used research resources such as collecting the materials in local communities by field survey concerning about mobility of labor, social mobility and farm household by field survey and accumulating the life history of farmers and farmers who left from farming. And I analyzed those researches with statistics of social economic history. As a result of research, two aspects have got clear; farm households have changed historically by the economic growth during high economic growth period and the spread of education in post war. On the other hand they have not changed because of regulation by household and village. Therefore I have acquired the key to realize efficiently the historical feature of prewar and postwar, after and before a high economic growth period in Japan from elucidation of household farm.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：高度経済成長、農家子弟、就農、離農、家、むら、教育、ライフヒストリー

1. 研究開始当初の背景

小作争議・地主制史の研究から出発し、戦前期を中心に農業・農村の社会経済史研究を行ってきた。その最後のテーマは日本村落の歴史研究であった。しかしなお、日本の「むら」をいかに捉えるか迷いと揺れは払拭できなかった。その研究が一段落した後、新たな研究領域に進み、日本の農家にアプローチしようと考え、本研究を着想するに至った。農家をどう捉えるかは「むら」論の鍵である。それに加え、本研究の決定的動機となったのは、本務校に残る馬路町農家資料との遭遇であった。昭和30年代前半「同志社大学村落調査団」により実施された馬路町調査は、原票中心とする膨大な資料群を残した。そこには世帯員ごとに年齢・職歴・収入構成・学歴・住居の移動を調べた「家族調査表」や、1870年以降家の系譜と代替わり、世帯主の職業や村での役職、他家との親類関係等を調べた「系譜調査表」など貴重な資料が含まれる。戦後や高度成長期の農家に関しては農業経済学の農村調査による多くの研究がある。しかし、現在の視点で農家史を再構成するとすると、そこには重大な問題点が残され、本格的な歴史研究の方法と視点によって深められるべき課題がある。歴史研究では馬路町農家資料のような文書資料や農家の日記、家計簿等の資料は貴重である。また、現在の視点で複数の歴史の当事者にインタビューを行い、ライフヒストリーを蓄積することも有効な研究方法である。こうした研究と社会経済史研究とを総合することによって、日本の農家とは何かを考察する手がかりが得られると判断し、本研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後、とくに高度成長期を中心に農家の子弟の就農と離農（離村を含む）の実態を検証するとともに、高度成長が家や村を軸とする地域社会に与えた影響を明らかにすることであった。「家」とは直系家族制としての文化型を維持する現代農村直系家族である。農家子弟については、後継者を中心に次三男や娘も付随的に取り上げる。就農の経路は新規学卒就農と離職就農、離農の経路は農家後継者の農外産業就職と離農就職があるが、それぞれ新規学卒後の動向を中心として離職就農と離農就職を付随的に取り上げる。①戦後の日本社会、なかんずく高度成長が農家子弟の就農と離農に与えた影響と、②家と村の社会的規範または社会関係の、農家子弟の就・離農に対する規定性を重視する。研究の実施にあたっては、社会経済史の手法による地域の事例・比較研究と一般的な統計・資料分析の方法に加え、農家子弟の行動の動機や家意識に焦点をあてること、あるいは文書資料だけの研究の限界性、調査可能な時間的制約を考慮し、農民（1935～55年生まれ、とくに団塊世代）や離農者のライフヒストリー（個人史）の蓄積に重点をおいた。この2つの方法の総合によって研究目的の達成をめざした。

3. 研究の方法

本研究は約5年間の予定で実施し、最終的に研究成果を著作に取りまとめることを目標としている。研究の方法としては、面接による聞き取り調査とアンケート調査を軸にした現地調査を重点的に行った。現地調査に関しては、資料の関係で京都府馬路町の調査が中心になった。しかし、これは他の調査地でも同様であったが、個人情報保護の壁が想定した以上に調査研究

の障害となった。本研究ではとくに重要な中学・高校卒業後の進路選択に関しては、資料的にほとんど実質的な分析が行えなかったことが悔やまれる。学校関係者には、学術研究においては法の適用は例外とされていること、そして当然のことながら個人情報取扱には最大限の注意を払うとともに、資料から得られた個人情報に関しては匿名処理することを丁寧に説明しても、理解を得ることは困難であった。本研究のように個人にまで踏み込んだ研究の遂行は、戦後史に関しては、大きな制約があることを痛感した。アンケート調査や聞き取り調査に関しても同様の制約があった。アンケート調査にあたっては、個人的なネットワークを活用したり、既知の地元団体の協力を得た。個人のライフストーリーのための聞き取り調査は、研究資料の蓄積を意図して一般の農家を中心に数多く実施することができた。これらは今後の研究にとっても貴重な資料である。馬路町資料をはじめ文書資料はそれだけでは限界があるものの、やはり本研究の財産である。その他の活字資料・統計としては、調査地域の役場広報・農協印刷物・公民館報・青年団印刷物や、地方史・個人史・団体史・学校史・青年文化運動・公民館運動関係の資料・文献、離農をはじめ農業農民問題や教育史関係、労働市場に関する多様な在地の文献・統計を収集することができた。なお、本研究を進めている最中に東日本大震災・福島第一原発事故が起きた。その復旧・復興は農家の離就農の問題は無関係ではない。地域づくりと農家の離就農の問題とともに、震災からの復旧・復興と農家の離就農の問題の研究も併せて進めた。

4. 研究成果

(1) 2010 年度

①京都府馬路町資料を分類整理し目録を作成した。現住農家のうち高度成長期に中学・高校を卒業した農家子弟をもつ農家を標本として抽出し、昭和30年代初めから現在までの家族の変化・移動と農業経営の変化等を検証して、明治初期～昭和30年頃の変遷につなげ、農家150年の歴史を再現した。また、数人の後継者・現住農家からライフストーリーの聞き取りを行った。②昭和30年代から40年代に活躍した神戸市北区の「北神戸農村青年クラブ」および「北神戸農業経営者会議」に関して、関連資料の個人資料ならびに行政資料の収集を行った。そして2集団の元リーダーにインタビューを行い、ライフストーリーの聞き取りを行った。また、北区との比較を目的として、同市西区の農家調査を行うとともに、関連資料を収集した。③野菜と水稻を軸に専業農家として活躍する兵庫県南あわじ市塩屋地区の40代から60代の生産者について、農家調査を行うとともに経営・就業と家族のライフストーリーを聞き取りした。その中で貴重な農家日記を発見収集することができた。④論文の作成・資料文献の収集…日本の村落（町村を含む）について、理論的・実証的研究を行った。これは本研究の導入部分をなすものである。また、馬路町資料や神戸市北区の北神戸農業経営者会議資料、農家日記等一次資料のほか、『戦後日本社会階層調査研究資料集』等資料・統計・文献を系統的に収集することができた。

(2) 2011 年度

①京都府亀岡市馬路町の全農家のアンケート調査を実施するとともに、部分的に集計作業を行った。明治初期～昭和30年頃の変遷につなげる2010年実施の農家

150年の再現調査の結果と突き合わせて検討した。また、個別農家のライフストーリーの聞き取り調査を継続して実施した。②神戸市北区の「北神戸農村青年クラブ」および「北神戸農業経営者会議」関係農家の資料調査、聞き取り調査を継続して実施した。③岡山県山地農民（現新見市）の日記・金銭出入帳等を「昭和の家」の視点から分析するとともに、家族から聞き取り調査を実施した。④1960年代農家後継者仲間であった山形市の7人の農民から、就・離農を中心としてライフストーリーの資料調査、聞き取り調査を実施した。④東日本大震災の復旧・復興に関して、岩手・宮城両県における被災農家の集落移転と離就農の調査を開始した。⑤刊行物および資料の収集と整理…これまでの村落研究をまとめ著作を出版した。これは本研究の一環であるとともに、本研究の基礎になるものである。刊行なった日記の推薦文の小文をまとめた。これは同日記等の分析結果の活字化の前段をなすものである。また、前年度に引き続き、関係資料・文献を系統的に収集した。聞き取り調査については、テープ起こしをするとともに適宜文章化していった。

（3）2012年度

①高度成長期における山形県の農家後継ぎの就農に関する研究。その1つは、上山農業高校（上山明新高校）の生徒について、学校要覧や生徒の手記、聞き取りをもとに後継ぎをはじめ農家の子弟の進路の選択や就農状況、農業と家に対する意識とその歴史の変容を分析した。この研究はあと1、2回追加調査を行った後、論文にまとめられる。もう1つは、旧南館村（現山形市）の農民の日記を発掘し、現在解読中である。高度成長期に就農した農民の意識と農業に対する姿勢、急激な開発と

農民の対応などがよくわかる学術的意義の高い資料であり、今後日記の出版の検討とともに、主に日記を利用して高度成長期の農民の社会史をまとめる。②研究継続中の馬路町に関しては、離村者アンケート調査の追調査を実施するとともに、一部聞き取りを行った。昨年までの研究と合わせ、2013年中に論文をまとめる予定である。また、岡山県山村農民（現新見市）の日記を中心とした研究では、日記解読がほぼ終了したので、農家子弟の動向に焦点を当て論文をまとめる。③旧大宮町（現京丹後市）の村づくりの歴史の調査によって、高度成長期以降現在までの農家子弟の進路選択、Iターン、Uターンなど新規就農の時代的特徴を検証し、他出経験や現在のIターン者と村づくりの関係を明らかにした。④東日本大震災・福島第1原発事故の復旧・復興に関して、家・村と農民の関係を明らかにするため、仙台平野沿岸部を調査対象として、被災農家の離就農と集落移転の調査を行った。⑤読書ノート「菅野正寿・長谷川浩編著『放射能に克つ農の営み』」をまとめ、農民の復興の試み、現場から積み上げた放射能測定運動に焦点を当て、理不尽な経験に遭遇しながらも、農業を守る新しい農村社会運動に立ち上がる農民に注目した。「私の研究紹介 村落の共同と自治の探求」はこれまでの研究の歩みを総括し、本研究の意義について再考したものである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計12件）

①庄司俊作、小さな村の「百貨店」と村、くらしと協同（くらしと協同の研究所）、査読無、2013、34-39

②庄司俊作、京丹後の村を再訪して、くらしと自治・京都（京都自治体問題研究所、査読無、395号、2013、4-5

③庄司俊作、農地改革、社会科教育（明治図書）、査読無、2013、16-17

④庄司俊作、「あの頃」を振り返って、キリスト教社会問題研究（同志社大学人文科学研究所）、査読無、61号、2013、222-224

⑤庄司俊作、インタビュー・私の研究紹介 村落の協同と自治の探求、くらしと協同（くらしと協同の研究所）、査読無、2号、2012、54-59

⑥庄司俊作、読書ノート・菅野正寿・長谷川浩編著『放射能に克つ農の営み—福島から希望の復興へ』コモンズ、京都自治研究（京都自治体問題研究所）、査読無、5号、2012、102-105

⑦Shunsaku, SHOJI, Rural Land Reform And Agricultural Land Committee in Post War Japan、社会科学（同志社大学人文科学研究所）、2012、査読有、94号、141-147

⑧庄司俊作、浮かび上がった昭和の「家」と家長の肖像、赤木祥彦編著『山地農民の昭和史——赤木勝太郎日誌・金銭出納帳』（終風舎）推薦リーフレット、2011、3

⑨庄司俊作、小作組合・協調組合と村落、社会科学（同志社大学人文科学研究所）、91号、2011、1-27

⑩庄司俊作、近現代の村落と地域的基盤機能、社会科学（同志社大学人文科学研究所）、90号、2011、197-222

⑪庄司俊作、T P P と国のかたち、くらしと自治・京都（京都自治体問題研究所）、369号、査読無、1-2

⑫庄司俊作、近現代村落史研究序論、社会科学（同志社大学人文科学研究所）、86号、査読有、2010、149-165

〔学会発表〕（計1件）

①Shunsaku, SHOJI, Rural Land Reform And Agricultural Land Committee in Post War : Land Reform as East Asian Modernization Project, The 4th Kyujanggak International Symposium on Korean Studies, 2011年8月25~26日、ソウル大学校（韓国）

〔図書〕（計5件）

①庄司俊作（共著）、ワーズ、能勢克男における協同、2012年、8-10

②庄司俊作（共編著）、日本生活協同組合連合会、大学の協同を紡ぐ、2012、3-10、16-41

③庄司俊作、日本経済評論社、日本の村落と主体形成—協同と自治—、2012、534

④庄司俊作（共著）、ワーズ、賀川豊彦のキリスト教と協同組合、2010、はじめに、7-10

⑤庄司俊作（編著）、田中プリント、いのちの里を守るために、2010、はじめに、28-44

6. 研究組織

(1) 研究代表者

庄司 俊作 (SHOJI SHUNSAKU)

同志社大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：70130309